

永遠と時間

(司会) 小浜 善信

はじめに

「永遠」について論じる者はこの時間的世界の事柄に関して無責任になる傾向があるというショーペンハウアーやニーチェなどの批判を経て、それを神学の問題と見て、哲学の問題として扱うことを意識的に避けようとするハイデッガーの姿勢などにみられるように、一般に、カント以降の哲学は、通常の実験を超えた事柄に関して論じることにきわめて慎重になっている。

周知のように、フッサールは、アウグスティヌスの『告白』第11巻の「時間論」の再検討を勧めたが、かれも検討すべき箇所を第11巻の14章から28章に限定している。しかし実は、フッサールが限定した章の前後は創造論ないしは永遠論なのであって、アウグスティヌスは第11巻で時間それ自体を問題にしたというより、創造論ないしは永遠論との関係で時間の問題に立ち入ったというのが真相である。

永遠論との関係で時間の問題に立ち入るとするのはアウグスティヌスに限ったことではない。ヨーロッパ古代・中世においては、アリストテレスが意識的に「自然学」の問題として「時間」を論じた以外は、たとえばプロティノスやトマスなどにおいてもそうであるが、時間という持続の問題が永遠という持続のそれから切り離されて議論されたことはほとんどないと言ってよいであろう。むしろ時間の問題は永遠のそれとの関係ではじめて問題になってくる。そのような問題意識の背後には、時間は永遠(的なもの)によって何らかの仕方で産出されたものであり、永遠なしでは時間は存在しないが、時間が存在しなくとも永遠は存在するという根本思想があると思われる。そのことを端的にしめしているのがプロティノスの『エネアデス』III 7の論題であろう。それは、「時間と永遠について」ではなく「永遠と時間について」とされている。プロティノスは、時間論から永遠論にではなく、永遠論から時間論へという順序を踏む。

プラトン、アッティコス、プロティノス

そのような古代・中世における「永遠—時間」論の祖型となったのがプラトンの『ティマイオス』における「永遠は時間の原型であり、時間は永遠の動く似像である」という思想である。今回のシンポジウムにおいてパネリストを務められた三氏は、プラトンのこの思想をめぐってそれぞれにきわめて示唆に富む見解を示された。

まず、納富信留氏は、プラトン自身のテキストを綿密に分析しながら、クセノファネス、パルメニデス、メリッソスなどの「ある」に関する見解をも視野に収めつつ、プラトンの「永遠—時間」論を次のように総括する。

「プラトンは、クセノファネス、パルメニデス、メリッソスと続く『ある』の時間的特徴づけを批判的に受容することで、新たな『永遠／時間』の対比を構築した。真に『ある』アイデアの『永遠性』は、時制をもたず、時の区別をもたない意味で、無時間的な『常に』であるが、パルメニデスのような『今、一挙に』という特徴づけや、メリッソスによる『無限』という特徴づけも退けている。他方で、永遠であるモデルの似像としての時間は、『あった／ある／あるだろう』という時制と時間の区別をもつ仕方、「常に」という永続性を有する」。

次に、金澤修氏は、納富氏も触れていた、「時間が宇宙生成と『同時に』生じた」というプラトンの主張についての、中期プラトン主義者アッティコスアッティコスの解釈を検討する。時間と宇宙の生成「以前に」は何かあったのか、それとも何もなかったのか。氏によれば、アッティコスアッティコスは、宇宙生成の「前に」「無秩序な動」が「先在」したと主張しているという。そして氏はアッティコスアッティコスの解釈を次のように読み解く。

「アッティコスアッティコスのプラトン解釈による宇宙制作とは、素材である『あの時間』に秩序が付与されるという一面を持ちながらも、秩序なき『あの時間』から秩序ある『この時間』への移行という一面をも有するのである（時間の二重化）」。

最後に、岡野利津子氏は、プロティノスの「永遠—時間」論が、プラトン解釈という建前をとりながらも、独自の展開を見せることを示す。

プロティノスは永遠を「有るものの、一者を廻る同一の生命」と規定する。これはヌースが「一者から出て」「一者に向かう」、つまり、一者から発して一者を振り返って見る、その内的活動が常に同一であることを意味している。ヌースは多様な形相としての一者の印象を一挙にすべて見ているために、常に不変で全体的であり、非延長的な無限の生命である。他方、ヌースから生み出された魂（宇宙靈魂）は、その外的活動によって時間を生み出す。時間とは「次々と異なる活動をし、連続的な一であり、限りなく常に次のものへと進み、部分的に存在しながら常に全体であろうとしている」魂の生命である。

まとめ

三氏の「永遠—時間」論から窺われることをいくつか記しておきたい。①プラトンの宇宙と時間の生成論では「無からの創造」ということは考えられていない。②プラトンの言う「永遠性」には「無限」という属性は認められていないが、プロティノスにおいては認められている。「無限」の理解に変化があったのかもしれない。中世に継承されたボエティウスの永遠の定義、すなわち「限りない生命を全体的同時に完全にもつこと」（*interminabilis vitae tota simul et perfecta possessio*）は、プラトンのそれによりはプロティノスのそれに近い。③「永遠」はプロティノスの体系においては「ヌース」の持続形態であって、「一者」のそれではない。「一者」は「永遠」をも超えた彼方である。中世における「永遠」は「神」の持続形態である。プラトン解釈という

かたちをとりながら、プロティノスの体系は独自の展開を見せているが、中世時代のキリスト教思想とも根本的に違う構造をもっている。